

静岡県自然観察ガイドブック

25

富士山東麓

FUJISAN-TÔROKU





自然保護憲章 (昭和49年6月5日制定)

自然をとうとび、自然を愛し、自然に親しもう。

自然に学び、自然の調和をそこなわないようにしよう。

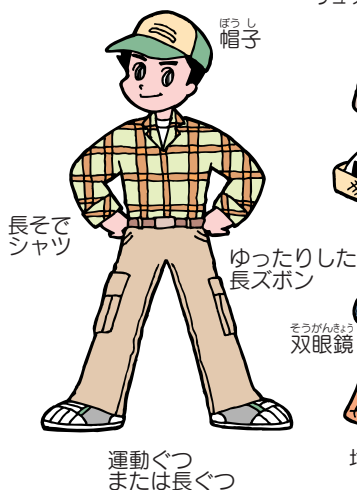
美しい自然、大切な自然を永く子孫に伝えよう。



出かける前に

- 大きな声を出さないで、静かに観察しましょう。
- 生きものはとらないで、観察のために必要なときは、観察が終わったらもとの場所にかえしましょう。
- 危険な場所、危険な生きものには注意しましょう。
- ごみは出さないようにし、もし出したら持ち帰りましょう。
- たき火をしたり、タバコを吸いながら観察したりすることはやめましょう。

自然観察の服装



自然観察の持ち物



交通案内

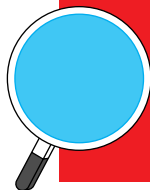
ふじさんとうろく 富士山東麓

- ふたつづか まくいわニツ塚・幕岩コース、小富士コースとも、4月末ごろから11月末ごろまで登山道のゲートが開きます。この期間だけ車で御殿場口新5合目こてんば すばしり、須走口5合目ちゅうしやじょうの駐車場へ行けます。
- 山頂へは、開山式の7月1日から閉山式の8月31日まで登ることができます。この2か月間だけ御殿場口、須走口へ、それぞれ御殿場駅ごてんばからバスが運行しています。

りんじ臨時交番も設置されます
(7月中旬ちゅうじゆん～8月最後の日曜日)。







ふじさん 富士山の成り立ち

富士火山は、その直下で3つのプレートが接し沈み込んでいる特異な地域（3重合点）にあります。関東地方がのるユーラシアプレート（北米プレート）の下には、東から太平洋プレート、南からは伊豆半島や箱根山をのせたフィリピン海プレートが沈み込んでいます。火山の分布、地震の分布もこれらのプレートの運動を反映しています。

（図1）

まず、数十万年前、小御岳火山（北側のスバルライン終点付近が山頂）、愛鷹火山と箱根火山が噴火しました。

富士山の形成は、およそ10万年前に始まりました。その後、1000回以上もの噴火によって膨大な量の溶岩とテフラ（火山灰や黒いスコリアなどの火山放出物）を噴出し、現在のような標高3776mの大きな成層火山ができあがりました。その活動は、静穏な時期をはさんで古期と新期にわかれます。



【図1】日本列島周辺のプレート境界と富士山
▲印 富士山

①古期の火山活動——約10万年前から8000年前まで

長い期間をとおして、同じような速さでスコリアと溶岩を噴出し続けました。平均すると100年から200年に一度の割合で爆発的な活動が見られました。1.8万年前の最終氷期で最も寒かった時期をはさむ2.5万年前～1万年前にかけての時期には、何回も山体崩壊を起こしたり、氷雪の下で噴火が起こって泥流が流れ出したりしました（古期富士Ⅰ期）。

1.1万年～8000年前ごろ、三島溶岩に代表される大量の溶岩を四方に流す活動が起こりました（古期富士Ⅱ期）。

②活動が静穏な時期——約8000年前から5000年前まで

御殿場市の東部では地表から3～5mの深さに、富士火山の爆発的な噴火がなかったことを示す厚さ1mもの、腐植物をたくさん含んだふかふかの黒土「富士黒土層」が見られます。これは噴火活動に静穏な時期があったことを示しています。この黒ボクとも呼ばれる「富士黒土層」には、南九州の海上に見る鬼界カルデラから縄文早期の6300年前に放出された火山ガラス「アカホヤ」が見られ、地層の年代を決める鍵になっています。

③新期の火山活動——約5000年前以降

平均して400年から500年ごとにやや大きな噴火が繰り返されました。

初期の5000年前～3000年前ごろには、溶岩（新期溶岩流）を流す活動が主体でした。溶岩に覆われ均整がとれた美しい富士火山が姿を表しました。続く縄文時代後期から晩期（約3000年前にか

けては、スコリアを噴出する爆発的な噴火が繰り返されました。

縄文時代の末または弥生時代初期（2300年前）に大地震・噴火に由来したとおもわれる大事件が起きました。富士山の山頂部が大きく崩れて「流れ山」となり、あるいは大規模な火山泥流（御殿場泥流）となって富士山東麓から黄瀬川・鮎沢川・酒匂川の谷を広く厚く埋めて、地形を一変させたのです。

有史時代には787年（天応元年）以降13回以上も噴火の記録があります。この中で、864年（貞観6年）と1707年（宝永4年）の噴火は特に大規模でした。

これらの噴火は、富士火山の地下に見る北北西—南南東方向に延びる構造上の弱線（縦の割れ目）からマグマが上昇してきたもので、富士火山の約80の側火山（寄生火山）の多くはこの線上に噴出し溶岩を流し、北西—南東方向に富士山の裾野を広げました。

二ツ塚も小富士もこれら側火山（寄生火山）の一つです。

864年の噴火は、富士山北西側山麓の側火口から、青木ヶ原溶岩が流れ出し、せの海を西湖と精進湖に二分しました。側火口である宝永火口の噴火もこの弱線上に水蒸気爆発が起り山体が吹き飛んだもので、火口の縁には、断層で上昇した古期の泥流「赤岩」が特異な姿を見せています。

④宝永の大噴火

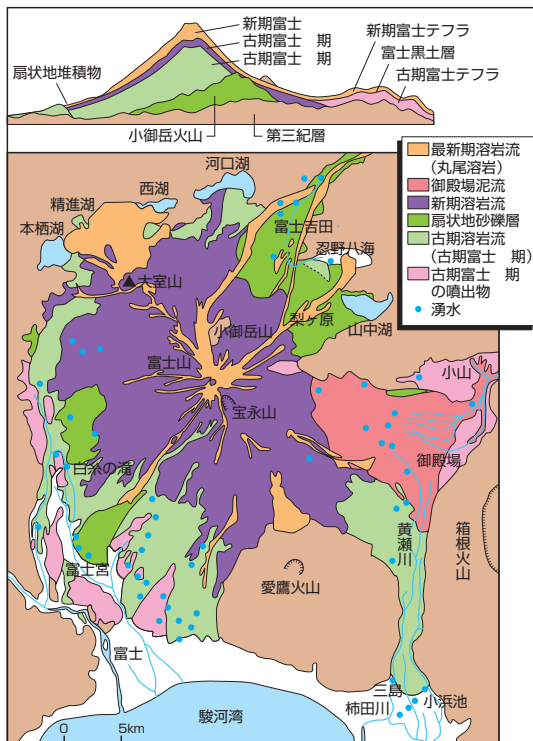
江戸時代中期、宝永4年（1707年）に起きた宝永の大地震の49日後、宝永の大噴火が始まりました。宝永噴火の放出物は西風によって江戸にまで達し、白い灰が、つづいて黒い灰が降りました。火口に近い富士山南東斜面は火山の放出物で火山荒原と化し、覆うスコリアは動きやすく、いまだに植物が根づきにくく、荒れ地

を見せています。

噴火当時、須走^{すばしり}村のほか、今は御^{おやま}殿場市や小山町^{とうろく}になっている東麓^{とうろく}の地域は、家も畑も1 mから4 mもの焼け石でおおわれ、復旧に30年もの歳月を要したといいます。

図2のように、御殿場市をはじめ、富士山周辺の表層の地質は、大部分が時代の異なった火山岩や火山砂礫^{されき}、火山灰、ローム層^{ろむそう}などの火山噴出物

から成り立っています。富士山に降り積もった雪は溶けて、溶岩と溶岩のわずかなすきまを通してゆっくりと浸透^{しんとう}し、柿田川^{かきだ}など、山麓^{さんろく}に豊かな湧水^{ゆうすい}を育んでいます。



【図2】 富士山の地形と地質の概略と主な湧水の分布

●^{とうろく}富士山東麓の地形・地質

富士山は火山です。火山というと溶岩ようがんがごつごつしているように思いませんか。御殿場口ごてんばや須走口すばしりから富士山を見てみましょう。なだらかな地形が目に入ってきます。また、足元を見てみましょう。御殿場口から続く砂走りは、日本でも最大級の砂走りです。

このような富士山東側の斜面は、溶岩ではなく、砂の集まりです。これは、噴火ふんかのときに出たもので火山灰と呼ばれます。特に富士山東側で多いのは、最も新しい噴火が宝永山で起こって、大量の火山灰や火山砂が西風で運ばれて降ってきたからです。

このような火山砂や火山灰が、噴火でたくさん降って積まりました。御殿場口駐車場西の谷や小富士コースの南側の谷で、地層のような縞模様しまで見えるのがそれです。縞模様を数えてみましょう。縞の1つ1つが噴火の回数です。そして、下の方が昔の噴火によって積もったもので、上の方の縞模様が新しい噴火で積もったものです。いちばん上にある厚い黒色をした火山砂は、江戸時代に宝永山が噴火したときのものです。

富士山も古い時代から何回もの噴火によって、できたのです。



御殿場口から宝永山の方を見上げると、お椀わんをふせたような形の小さな山が二つ見えます。二ツ塚ふたつづかといわれますが、この山も御殿場口と同じような火山砂からできています。これは富士山の噴火が山頂の火口だけでなく、別の場所で火口ができて噴火したことを現しています。このような山頂以外での噴火によってできた火山を寄生火山きせいといいます。富士山には、たくさんの寄生火山があって、何とか山とか、何とか塚づかと呼ばれています。二ツ塚も寄生火山ですから、二ツ塚の頂上に登ってみると、すり鉢ばちのような火口をいまでも見ることができます。

さて、溶岩を見に行きましょう。御殿場口の幕岩まくは、溶岩が切り立って幕のようになっています。溶岩の表面は全体的に灰色ですが、近づいて見ると0.5～10mmほどの白い細長い結晶けっしょうがたくさん見られます。溶岩は、地下のマグマが噴火によって地下から出てきて、固まったものです。

噴火によってできた岩石は、結晶と結晶していない部分からできているのが特徴とくちょうです。ルーペなどで探すと、黒い結晶やオリーブ色をした宝石のような結晶を見ることができるかもしれません。



●富士山の気候と雲

1. 登山と気温

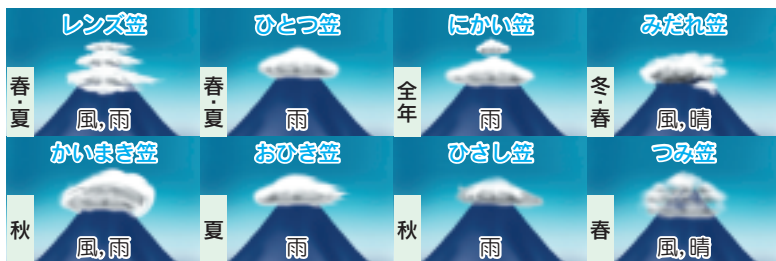
登山に行くとき、週間予報とか明日の天気予報を聞いて出かける人が多いでしょう。しかし、運悪く天候が急変したときは、勇気をもって中止するか延期する——この決断が必要となることがあります。その理由の一つが気温の低減です。ふつう私たちは、高山に登ると涼しさを感じ、ときには肌寒く感じたりします。これが身近に実感できる気温の低減の例です。

気温は、100m登ると0.6℃下がります。標高2000mの山に登る場合、山頂の気温は平地に比べると12℃下がっていることとなります。仮にいつも住んでいる所が標高500mとすると、平地から500m分の温度差が差し引かれても、山頂はさらに9℃も低いこととなります。また、悪天候に霧や風はつきもので、途中で霧や風が急に強くなった場合の体感温度はもっと低温になり、生命に危険な状況も発生します。安全で快適な登山ができるよう、登山口では天候のチェックと万全の準備を再確認してから出発しましょう。

2. 御殿場から見える富士山の珍しい雲

山頂に帽子をかぶせたように出る雲を笠雲といい、天気が変わる前ぶれです。図の雲の形や天気を覚えましょう。

(当日または翌日に雨が降った出現率は、年平均72%)



3. 雲を見る



▲富士山の雲の発生モデル（レンズ雲・笠雲・つるし雲）

雲の分類は全世界で統一されていて、10種類に分かれます。春から秋にかけて晴天のときに現れる綿雲とは、積雲です。この雲は、日ざしが強まり地表付近の温度が上がって空に向かって上昇気流が発生すると、地表から1000m付近の高さに雲底を平らにしてふわりと綿のように浮かんで見えるのが特徴です。

また、夏の日ざしが強く、風の弱い日にいろいろ形を変えながら発達していく積乱雲は、地表から15000mの高さにも達する雲で、入道雲とか雷雲とも呼ばれて、落雷、夕立、突風を伴うこともあります。

天気が悪くなることを知らせてくれる雲は巻層雲です。この雲が太陽にかかると日笠、月にかかると白色の笠が見えます。これは、雲がごく細かく氷の粒からできているので、光の波長が氷晶を通るとき、屈折のちがいで現れます。

発達中の雲が刻々と変化していく姿は、動物や食べ物を連想されることもあり、時には私たちを夢の世界へ案内してくれます。

一日ゆっくり雲を眺めてみませんか。

●富士山の垂直分布

〈植 物〉

富士山を登りながら、標高が高くなると、気温が下がり、生えている植物の種類が異なってくることに気がつきます。標高の違いによる植物や動物の分布の変化を、生物の垂直分布と呼んでいます。

日本一高い富士山は、植物や動物の垂直分布を観察するのに適しています。

A 上部高山帯 ^{たい}コケ・地衣類帯 (3550~3776m)

B 高山帯 イワスゲ帯 (3000~3550m)

イワスゲ イワツメクサ オンタデ
ミヤマオトコヨモギ ミヤマウシノケグサ

C ^あ亜高山帯 シラビソ帯 (1600~3000m)

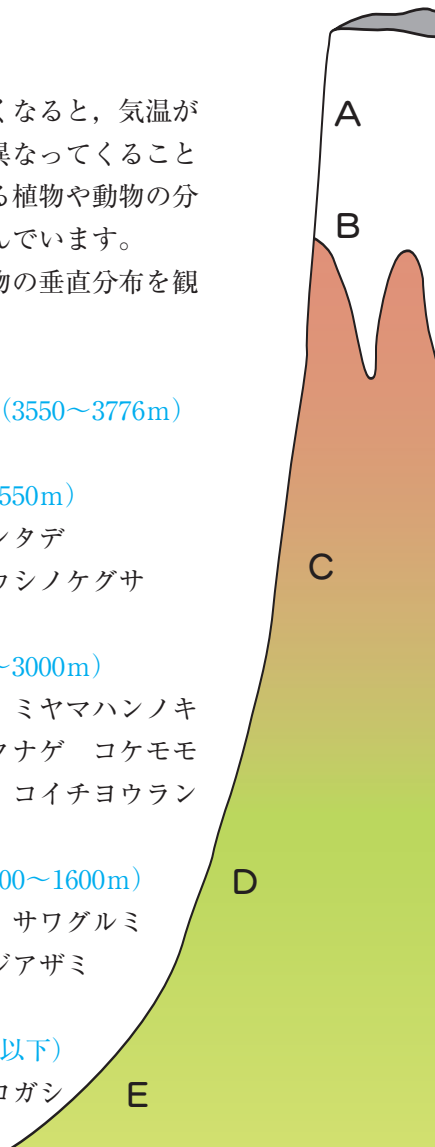
シラビソ コメツガ トウヒ ミヤマハンノキ
ミヤマヤナギ ハクサンシャクナゲ コケモモ
タカネザクラ タカネイバラ コイチヨウラン

D 山地帯 ブナーミズナラ帯 (700~1600m)

ブナ ミズナラ ヤマボウシ サワグルミ
ヒメシャラ マメザクラ フジアザミ

E 低地帯 シイーカシ帯 (700m以下)

アラカシ シラカシ ウラジロガシ
アオキ ヤブツバキ



〈鳥 類〉

鳥類は自然環境^{かんきょう}や生息のために、下の分布図以外のところでの繁殖^{はんしよく}または移動もあります。

3000m

カヤクグリ イワヒバリ ホシガラス アマツバメ

2000m

キクイタダキ ウソ キバシリ マミジロ サメビタキ
コガラ ミソサザイ ゴジュウカラ ルリビタキ
トラツグミ アカハラ ビンズイ ツツドリ ヒガラ
コルリ アオバト イワツバメ ジュウイチ キビタキ

1000m

アオゲラ アカゲラ コゲラ ヨタカ カッコウ
カケス トビ ツミ ノスリ ホトトギス メジロ
コムクドリ キジ ホオアカ ホオジロ ムクドリ
キセキレイ ヒヨドリ オオルリ オオタカ
エナガ シジュウカラ センダイムシクイ
ウグイス クロツグミ セグロセキレイ
カワセミ サンショウクイ サンコウチョウ
ヤブサメ キジバト モズ ヤマガラ
コサメビタキ ハシボソガラス

●富士山東麓のおもな植生^{しょくせい}

富士山の東側山麓では、火山にふさわしい噴火の^{ふん か えいきょう}影響を受けた変化に富んだ植生を観察することができます。

宝永4年(1707年)、南側中腹の3つの火口からの噴火は宝永山を誕生させました。この大噴火はかつて広がっていた森林を焼き^{はら}払い、植生は火山砂やレキに埋もれ、そこには広い火山^{こうげん}荒原が誕生したのです。約300年の時が流れ、火山荒原にも植物が少しずつ生育しはじめました。荒原、草原、森林など変化に富んだ植生を観察することができます。



▲小富士下からの植生景観

火山荒原

火山荒原には土は少なく、水^{たくわ}を蓄える力もなく、乾燥^{かんそう}しています。夏の高温、冬の低温と植物の生活にとっては大変きびしい^{かん}環境^{きやうけい}です。また、冬には雪崩^{ゆたれ}が発生します。地面に根を張って生きる植物にとって雪崩は破壊的なできごとです。

しかし、この荒原だけに生育する植物があります。フジアザミ、ヤマホタルブクロ、フジハタザオ、オンタデなどはその代表種です。これらの植物が、火山荒原にまばらに生えているようすは火山である富士山に最もふさわしい景観です。



▲火山荒原

カリヤスモドキ草原

荒原のやや平坦なところには草原が発達します。火山荒原に植物^{しんじやう}が侵入し、草原へと移り変わったもので、富士山にふさわしい植生^{しんじやう}です。カリヤスモドキやヒメノガリヤスのイネ科植物が優占^{ゆうせん}

し、キオン、クサボタン、ノコンギクなどが生育しています。カリヤスモドキの優占した草原は、二ツ塚^{づか}周辺、須走口^{すばりぐち}登山道西側^{しやめん}斜面に広く見られ、火山である富士山の植生にふさわしい草原として大切にしていきたいものです。



▲カリヤスモドキ草原

山地帯のブナの森

標高700m～1600m付近はブナ、ミズナラ、カエデ類からなる夏緑^{じゆりん}広葉樹林が発達します。夏緑広葉樹は落葉樹で、夏には緑葉でおおわれますが、寒さの厳しい冬には落葉^{きゆうみん}し休眠します。森は、春の芽吹^{めぶ}きや新緑、秋の紅葉、冬の落葉と季節ごとにリズムカルに変化^{こんにち}します。今日残されているブナの森は少なく、貴重な森として大切に守り育てたいものです。



▲山地帯夏緑広葉樹林

亜高山帯の針葉樹の森

標高1600m～2400m付近には亜高山帯針葉樹林が発達します。シラビソ、コメツガ、トウヒの常緑針葉樹が密^はに生え、うっそうとした森を観察することができます。森の中には落葉針葉樹のカラマツの巨木も見られます。針葉樹の森の中はうす暗く、カニコウモリ、コイチャクソウ、コバノイチャクソウ、タケシマラン、コフタバラン、ヒメミヤマウズラなどがまばらに生え、コケ類^{とくちゆう}が一面に生えているのが特徴です。



▲亜高山帯針葉樹林

●富士山東麓のキノコ類

ホコリタケ (ホコリタケ科) 夏～秋

道ばたに生え、風船のような形をしています。古くなるとてっぺんに穴があきますが、そっとたたいてみると、茶色い煙けむりのようなものを出します。この煙には孢子ほうしというタネと同じものが含まれています。キノコ類は孢子で増える微生物の仲間なので



▲ホコリタケ

ツリガネタケ (タコウキン科・木材腐朽菌) 周年

枯れ木や倒木から生える固いコブのようなキノコはサルノコシカケの仲間です。木材を腐らせる強い力をもっていて、木を分解して土に戻してくれます。こうして親の木が倒れたあとに、新しい子どもの木が芽生えて森が続いていくのです。



▲ツリガネタケ

マツサカキノコの仲間 (キシメジ科・落葉分解菌) 晩秋

晩秋の森でキノコを見つけたら、そっと掘り起こして何から生えているか見てみましょう。写真のキノコは松ぼっくりから生えますが、種によりアカマツ、トウヒ、コメツガなど好みが違います。落葉や木の実を分解する小さなキノコには、まだ名前のない種類もたくさんあります。



▲マツサカキノコの仲間

ショウゲンジ (フウセンタケ科・共生菌) 秋

傘^{かさ}の直径は約5cm。傘と柄^えを作る
柔らかくて大きなキノコの多くは、
地下の木の根と協力して生きている
共生キン (菌根菌) の仲間です。キノコは木の根から栄養をわけてもらい、その代わりに根が栄養分を吸収するのを助けてあげます。



▲ショウゲンジ

ミヤマハナゴケ (ハナゴケ科・地衣類) 周年

標高の高い所では、地面や岩や木の肌^{はだ}に白っぽい薄緑色^{うす}のコケのようなものが目立ちます。これはキン類とソウ (藻) 類が合体した生き物 = 地衣類です。寒さや乾燥^{かんそう}に強く、高山やツンドラでも生育^{よこ}できますが、空気が汚れていると生きていけません。



▲ミヤマハナゴケ

シロジクキモジホコリ (モジホコリ科・変形菌) 夏～秋

高さ約1.5mm。落ち葉や倒木の裏を探すと、色あざやかなマイクロサイズのキノコのようなもの = 変形キンが見つかります。若いときはアメーバで地面をはい回ってえさを食べますが、満腹すると、一晩で小さな粒状^{つぶ}のキノコに変身する不思議な生き物です。



▲シロジクキモジホコリ

●富士山東麓の小動物

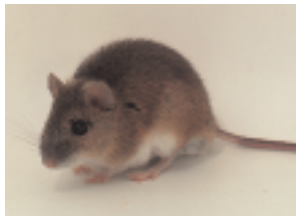
ふたつづか ほじゅう 二ツ塚付近にすむ哺乳類

明るい林には、ノウサギ、野ネズミ類、モグラ類が棲^すんでいます。たいていは夜、活動する夜行性の動物ですから、日中の観察で彼ら^{かれ}の姿を見ることはめったにありません。

アカネズミ

明るい林が好きな野ネズミです。とてもジャンプ力があり、高さ30cmくらいなら楽に飛び越^こします。

昼間はトンネルの奥^{おく}で休み、そこは木の葉がいっぱいつま^おっていて、居心地よくできています。明るいうちは、トンネルから出ません。外にはキツネやタカがいて危険なことを知っているのです。



▲アカネズミ

ヒミズモグラ

落ち葉をそっとのけて見ると、フワフワした土が見つかりますが、そこはヒミズモグラが食べ物のミミズなどを探し回^{まわ}って食べた跡^{あと}です。夜、暗くなるとトンネルから外に出てくることもあります。



▲ヒミズモグラ

トガリネズミ

鼻づらがとがったネズミのような動物ですが、モグラの仲間です。大きな岩の下などに棲^すんでいます。およそ4時間ごとに活動と休息^くを繰り返^くし、小さな虫^{こんちゅう}や昆虫を食べています。



▲トガリネズミ

小富士付近にすむ哺乳類

暗い混交林の中には、大きなツキノワグマ、ニホンカモシカ、小さなトガリネズミ、ヤマネ、ヒメネズミ、ムササビ、ニホンリスや、これをねらうテンなど、木登りがうまい動物たちが多くいます。

ツキノワグマ

クマはとても数少ない動物で、姿を見ることはまずありません。人がやってくるのを感じるとすぐに森の奥へ逃げてしまいます。動き回るのはおもに夜で、草の根や木の実、果物、アリなどを食べます。



▲ツキノワグマ

ニホンカモシカ

ふだんは暗い林の中にいます。木の葉などを食べ、^{がけ}崖の上などの見晴らしのよい場所に出て、のんびり反芻（^{はん}食物を胃から口に戻して噛み直すこと）をしています。林の中にはつぶつぶの糞^{ふん}や、砂の上には足跡を見つけることができます。



▲ニホンカモシカ

ニホンリス

リスはほとんどを木の上で過ごします。日の出とともに巣を出ると、食べ物を探しにいきます。シラビソの実をはじめさまざま木の実、新芽、昆虫などを食べます。夕方になると巣に戻り休息します。



▲ニホンリス



このコースは、富士山が噴火したあとの荒原が草原になり、森林へと移っていくようすを短い時間で観察できる変化に富んだ魅力あるハイキングコースです。見通しのよい所に立てば、その変化を一度に見ることができます。

御殿場口新五合目駐車場近くの林縁にある立て札〈幕岩入口〉から入ります。幕岩までは明るい自然林で、歩きやすい遊歩道が整備されています。春には平地より約1か月遅れのみずみずしい新緑が楽しめます。夏の森林の中の涼しさも心地よく、秋の紅葉もみごとです。

高さ30mの大溶岩などの断崖が幕のように連なる幕岩を過ぎ、足もとにベニバナイチヤクソウなどを見ながらダケカンバやカラマツの林を抜けると、二ツ塚（二子山）までずっとカリヤスモドキの草原です。このような自然の草原は日本には珍しく貴重なものです。

二ツ塚をあとにして、出発点の駐車場までは足場の不安定な火山砂・レキ地の荒原です。砂地に根を下ろした植物が点々と固まりを作っています。そこにカラマツやバッコヤナギなどの木が生えてくると、いつかこの荒原も森になっていくことでしょう。

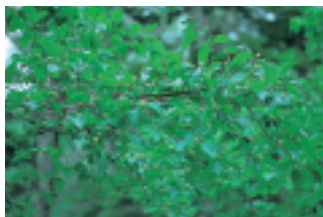
駐車場に着いて下りてきた方を見ると、晴れていれば山頂が間近に迫ってきます。そこには植物が頂上めざしてがんばっているようすも見られます。また、濃い霧の日は、方向がわからなくなるときがあるので注意が必要です。

●明るい自然林の樹木

遊歩道沿いには、ブナ・ミズナラ・カラマツ・ケヤマハンノキ
ダケカンバ・ヤマボウシ・ナナカマド・ヒメシャラ・カエデ類な
どが茂り、若い林です。新緑やオオカメノキ・ミヤマガマズミ・
マメザクラなどの花々、そして緑葉から紅葉と楽しませてくれる
森です。動物の餌になる木の実の種類もたくさんあります。

ブナ（ブナ科）

大木になり、秋には黄色く紅葉した葉を一本で50～60万枚も落とし、その下に5～8トンすがすがの水をたくわえます。そのため森が清々しく感じられるので人気があり、自然環境かんきょうの面からも注目されています。



▲ブナ

ミズナラ〈オオナラ〉（ブナ科）

低地のコナラに似ていますが、全体に大型です。実も大きなドングリで、ネズミなどが喜んで食べます。

ワインだるなど、私たちの生活に利用されています。



▲ミズナラ

マメザクラ（バラ科） 4～5月

富士山に多く、フジザクラとも呼ばれます。全体に小型で、小さな花がいっぱい下を向いて咲きます。葉のつけ根あたりにつぶのような蜜腺みつせんが左右一つずつ付いていて、サクラの仲間とくちゅうの特徴です。



▲マメザクラ

●明るい自然林の草花

マイヅルソウが密生しているのが目立ちます。ヤマホタルブクロ・フジテンニンソウ・ミヤマエンレイソウ・ヤマトリカブト・ツルシロカネソウなども森に彩りを添えています。

マイヅルソウ (ユリ科) 5～7月

地下茎^{けい}が横に長くはって群れて生えるので、小さい草ですが目に止まります。葉の脈がツルが羽を広げたようなのでこの名がつけました。白い小さな花が集まって咲き、花のあとには赤く丸い実があざやかです。



▲マイヅルソウ

ミヤマエンレイソウ (ユリ科) 4～6月

林内の湿^{しめ}った所に咲くことが多い花です。

三枚の葉の真ん中から横向きに花を一つ付けます。

緑の葉も白い花も、大きめで変わった形なので、よく目立ちます。



▲ミヤマエンレイソウ

フジテンニンソウ (シソ科) 9～10月

林内や林縁に群れて生えています。まっすぐ伸びた四角形の固い茎^{くき}の先に、うすい黄色の筒形の花をいっぱい付けます。葉裏の脈の上に毛が生えているのが肉眼でもわかります。

富士山周辺に多いので、名前にフジがついていて、無毛のテンニンソウと区別しています。



▲フジテンニンソウ

●草原の植物

カリヤスモドキの自然草原の中には、クサボタン・イワオウギムラサキモメンヅル・ネバリノギラン・ノギクの間などが、ところどころに小さなお花畑を作っています。タヌキのしっぽのようなコタヌキランもあります。

カリヤスモドキ (イネ科) 8～9月
ススキより小さくて刈り取りやすいことから「カリヤス」と呼ばれる草があります。カリヤスモドキは、そのカリヤスに似ている小さなススキのような草です。穂が2～5個と少なく区別できます。



▲カリヤスモドキ

クサボタン (キンボウゲ科) 8～9月
山地の明るい草原や林縁に多く生えています。ちょっと見ると木のようですが草です。うす紫色のつりがね形の花を下向きにたくさんつけます。花は開くとそりかえり、細かい絹のような毛が生えています。オスの株とメスの株があります。



▲クサボタン

ネバリノギラン (ユリ科) 6～8月
日本の高山や深山にだけ生えています。花や茎に指でさわると粘るので名がつけました。黄緑色でつぼ形の花をたくさんつけますが、地味なので見落とすかもしれません。



▲ネバリノギラン

こうげん ● 荒原の植物

ふたつづか ごてんば ちゅうしゃじょう ふんか
二ツ塚から御殿場口新五合目の駐車場までは、宝永山の噴火で
できた火山荒原です。移動する火山の砂やレキ、強い風、乾燥、
低い気温と、厳しい環境ですが、この荒原に生活している植物が
あります。イタドリ・オンタデ・ミヤマオトコヨモギ・フジハタ
ザオ・フジアザミ・ムラサキモメンヅル・イワオウギなどの植物
で先駆植物と言われます。地中深く根を伸ばして点々と寄り集
まって育っています。

フジアザミ (キク科) 8～10月

富士山に多いので、名前にフジが
ついています。直径10cmにもなる大
きな頭花は、アザミの仲間では日本
一です。巨大な美しい頭花ですが、
うっかりさわれません。葉には鋭い
トゲがいっぱいあるからです。



▲フジアザミ

ヤマホタルブクロ (キキョウ科) 7月

花の中にホタルを入れたので名前
がつけられたというホタルブクロは、
ガクとガクの間がそりかえっていま
す。山地のヤマホタルブクロはそこ
がコブのようにふくらんでいます。



▲ヤマホタルブクロ

フジハタザオ (アブラナ科) 6～8月

富士山だけにある植物です。

やや大きめの白い十字形の花が荒
原にポツンと咲いているようすは、
かわいらしく、たくましく、感動的
でもあります。



▲フジハタザオ

●植物群落の移り変わり（森はどのようにつくられるのか？）

富士山の南東斜面は、1707年（宝永4年）の噴火により火山の砂やレキが厚く堆積し、植物や動物のいない荒原となりました。

しかし、時が流れ、コケや草が生活を始め、徐々に土も作られ、背の低い木も芽を出し、乾燥に強いカラマツも生育しはじめます。噴火から約300年の時が経過した今日、若い森も誕生しました。火山荒原から森に移り変わるようすを図に示しました。

富士山の南東山麓は荒原から森林へと群落に移り変わっていく過程を観察するのに適したところです。荒原から草原へ、さらに森へと群落に移り変わるようすを観察してください。

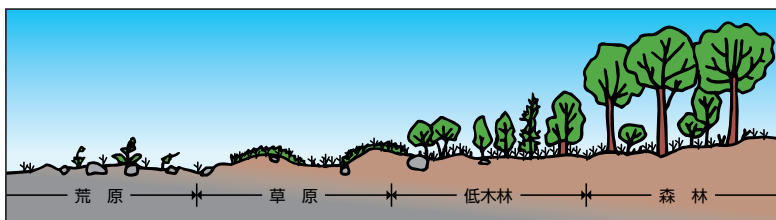


▲荒原

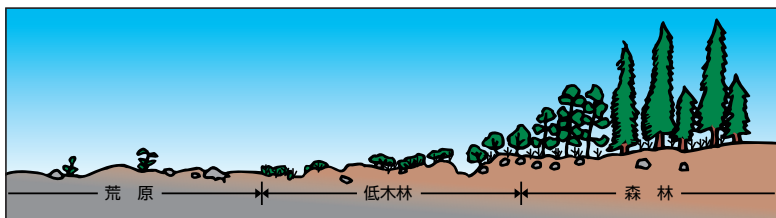
▲草原

▲カラマツの侵入

▲森林



▲海拔700～1600m域の群落の移り変わり



▲海拔1600～2400m域の群落の移り変わり

●富士山東麓のシダ類

ミヤマクマワラビ（夏緑性）

少し高い山の林下に生えます。株の中央から7～8枚ほどの葉を叢生そうせいします。似た種類にオシダがありますが、ミヤマクマワラビのほうはほっそりし、軸じくの鱗片りんぺんが黒い（オシダは茶褐色かつしよく）ので区別たろうぼうできます。太郎坊では両方見ます。



▲ミヤマクマワラビ

ホソイノデ（夏緑性）

イノデ類というシダのグループがありますが、ホソイノデは少し高い所に生えるイノデの仲間。全体的に細くてスマート。葉の下のほうはずっと細まり、孢子ほうしのう群とくちようめずらが中央に寄るのが特徴。珍しい種類ですが、富士山には多いです。



▲ホソイノデ

イヌガンソク（夏緑性）

孢子をつける葉（孢子葉）と、つけない葉（栄養葉）とが、まったく違う形をしています。孢子葉のほうはガンソク（雁足）と言われて保存がきき、花材に使われます。太郎坊から幕岩まくいわまでのコースにも点々と見られます。



▲イヌガンソク

クサソテツ (夏緑性)

少し高い所の草原に群生しているのを、よく見ます。太郎坊付近たろうぼうにもあります。春の若芽はコゴミと呼ばれ、あく抜きぬしなくても食べられ、たいへんおいしいものです。胞子葉ほうしは、イヌガンソクと同様、花材に使われます。



▲クサソテツ

クジャクシダ (夏緑性)

名前の通り、クジャクが羽を広げているような形をしています。シダ植物の見分けは、一般いっぱんに大変難しいものですが、クジャクシダに関する限り、他の種類と見まちがえることはないでしょう。園芸店にあるアジアタムの仲間。



▲クジャクシダ

マンネンスギ (常緑性)

えっ、これもシダ植物ですか？とよく聞かれますが、立派にシダ植物の仲間です。名前の通り、スギ(杉)に似ています。少し高い所の湿しめった林下に生えます。最近では、花材としても多く使われるようになっています。



▲マンネンスギ

●富士山東麓の鳥類

コガラ (シジュウカラ科) 留鳥

全長12.5 cmでスズメより小さく、頭がベレー帽をかぶったような黒色と、喉の蝶ネクタイのような黒斑が特徴。亜高山の針葉樹林や、その下の落葉広葉樹林などで見られます。ソフトな声で「フィツ〜フィツ〜」と、ゆっくりさえずります。



▲コガラ

ゴジュウカラ (ゴジュウカラ科) 留鳥

全長13.5 cmでほぼスズメ大。尾は短くて過眼線は黒、体の上面は青灰色で下面は白色。低山から亜高山帯の落葉広葉樹林で見られ、幹に垂直に止まったり、逆さまに幹を回って下りる習性があり、早春から「フィー〜フィー〜」とさえずります。



▲ゴジュウカラ

コルリ (ツグミ科) 夏鳥

全長14cmでスズメ大。♂の上面は暗青色で下面は白色。低山から亜高山帯の下生えの多い落葉広葉樹林に生息し、下層にいるので姿を見るのは難しく、さえずりは前奏の「チツチツチツ…」に続いて「ヒンカラカラ…」と、コマドリに似ています。



▲コルリ

ヤマガラ (シジュウカラ科) 留鳥

全長14cmでスズメ大。頭は黒色、
のど喉も三角状に黒色で、ひたい額とほほ頬はクリーム色、わき脇は栗色でくさり翼は灰黒色。富さんろく士山麓の広葉樹林帯で見られます。固い木の実をお両足で押さえ、くちばし嘴で割って食べます。「ツーツーピー」と、ひかくてき比較的ゆっくりさえずります。



▲ヤマガラ

キビタキ (ヒタキ亜科) 夏鳥

全長13.5 cmでほぼスズメ大。♂の
びはん眉斑は黄色、のど喉からいろい腹は橙色から黄色で、上面は黒色。山地の広葉樹林や針広混合林で見られ、樹間を飛ぶ昆虫をこんちゆう捕食 (フライキャッチャー)。一部、せみ蟬のツクツクハウシに似た美しい声でさえずります。



▲キビタキ

カヤクグリ (イワヒバリ科) 漂鳥

全長14cmでほぼスズメ大の日本固有種。全体がじみ地味な暗褐色で、上面には赤味があり、下面は灰色味がかかり、あ亜高山帯から高山の灌木林で見られます。ミソサザイに似た早口で、すず鈴を鳴らしたような澄んだ声すでさえずります。



▲カヤクグリ

ウグイス (ウグイス科) ^{ひょう}漂鳥

全長14～16cm。繁殖期には「ホーホケキョ」とよくさえずりが聞かれます。枝の中にいることが多く、姿を見ることは少ないです。うぐいす餅もちのような鮮やかな緑色あざではありません。冬期は里で過ごし「チャチャ」と地鳴きをします。



▲ウグイス

キジバト (ハト科) 留鳥

全長33cm。「デデポーデデポー」とゆっくり鳴きます。体は灰褐色で地味ですが、首の青い羽根がポイントです。人家から開けた山林にかけて見られます。繁殖期には羽根を広げ、羽ばたかずに滑空かっくうする姿が見られます。



▲キジバト

エナガ (エナガ科) 留鳥

全長14cm。「ティティ、ティティ」という強い声と「ジュリリジュリリ」と鳴き、全体に白っぽく見える体の約半分が尾なのでエナガお(柄長)の名が付いています。明るい林を好み、枝先の餌えさをついばむ姿が見られます。



▲エナガ

ビンズイ (セキレイ科) ^{ひょう}漂鳥

全長16cm。標高800mの林から2100mの砂礫地^{されき}で繁殖^{はんしよく}します。ヒバリに似ていますが、ヒバリと比較^{ひかく}すると緑色^{こぞえ}っばいです。繁殖期^{わた}には梢や枝から枝に渡りながら「ビン、ツインツイー」とさえずる姿が見られます。冬期は里に降ります。



▲ビンズイ

アカゲラ (キツツキ科) 留鳥

全長24cm。下腹部が赤い啄木鳥^{きつつき}の意味で名が付けました。幹に縦にとまり「キョッキョッ」と強い声を出します。キツツキ類はさえずらないので、縄張り宣言は木をくちばしでたたいて「タララ…」という響き渡る音^{ひび}を出します。



▲アカゲラ

トラツグミ (ツグミ科) 漂鳥

全長30cm。薄暗い林を好み、夕方から朝にかけて、また雨天のときは昼間でも「ヒーヒョー」と気味の悪い声で鳴きます。黄色い体^{はんでん}に黒い斑点があり、トラの模様に見えるのでトラツグミの名が付けました。ミミズが大好物です。



▲トラツグミ

●富士山御殿場口の昆虫

御殿場口新五合目から幕岩^{まくいわ}、二ツ塚^{ふたつか}を回って新五合目^{もど}に戻るコースでは、新五合目の駐車場^{ちゅうしや}周辺、幕岩までの森の中の開けた場所、幕岩周辺から二ツ塚までの火山性草原が昆虫類の観察に適しています。これらの場所では、花が多く咲^さいているため、そこに集まる昆虫類を見ることができます。7、8月頃^{ころ}に見ることができる昆虫のおもなものを紹介^{しょうかい}します。

アリ塚

幕岩までの森の中に、開けた空間が数か所あります。ここに針葉樹の落ち葉などがこんもりと盛り上げられたものが見つかります。これはエゾアカヤマアリの作ったアリ塚です。

塚をくずすと、たくさんのアリが出てきます。攻撃^{こうげき}性が強いアリです。かみつくので注意が必要です。



▲エゾアカヤマアリの巣（塚）

コムラサキ

アリ塚が見られる場所などで、地面にとまっているチョウが見られます。オスの羽がむらさき色にかがやいていることからコムラサキという名前が付けられています。この紫色^{むらさき}は角度によってそのかがやきが消えて見えます。幼虫はヤナギ類の葉を食べます。この辺りでは、バッコヤナギの葉を食べています。



▲コムラサキ

アサギマダラ

ヒヨドリバナにすきとおった水色の部分を持った大きなチョウが群がっていることがあります。アサギマダラといいます。春と秋に渡りわたをすることで有名なチョウで、富士山でマークをつけて放したチョウかが鹿児島かごしまの喜界島きかいしまで見つかった記録もあります。フワフワ飛んでいます、おどろ驚かすとまっすぐ上の方へ上がり、飛んでいってしまいます。

ヒヨウモンチョウの仲間

オレンジ色に黒い斑点はんでんが付いていて、ちょうど動物のヒヨウのような模様の羽を持ったチョウが花にきています。羽の模様からヒヨウモンチョウと呼ばれる仲間です。

このあたりでよく見られるのはウラギンヒヨウモン、ギンボシヒヨウモン、オオウラギンスジヒヨウモン、ミドリヒヨウモンなどです。お互いによく似ているので、飛んでいるときには区別がつかえません。うしろ羽のうら側の模様が違うので、花の蜜を夢中で吸っているときによく見て、その違いを確認しましょう。



▲アサギマダラ



▲ウラギンヒヨウモン



▲ギンボシヒヨウモン



小富士コース



砂走リ
砂払い五合目
富士山頂へ

古御岳神社

須走口五合目
150台 P
(トイレ、夏季交番有り)

バス 7/1~8/31

御殿場駅 ↔ 須走新五合目

須走5合目駐車場より小富士まで15分ほどのコースです。小富士の山頂から、晴れた日は富士五湖の山中湖、河口湖などがよく見えます。カラマツ林の中で小鳥の声を聞きながら登り下りの少ない道を小富士まで行き、戻るのがよいでしょう。

小富士から馬返しへは下りの道になります。車で5合目に来た場合は、馬返しへ下ってしまうと戻りが大変になります。ミニグランドキャニオンへは、馬返しから行くのがよいでしょう。雄大な火山噴出物の地層を見ることができます。

※落石の危険のある所です。注意して歩きましょう。



●^あ亜高山帯針葉樹林

須走口五合目付近には、シラビソ、トウヒ、コメツガなどの針葉樹からなるうっそうとした森が見られます。樹木は密に生え、葉は光をさえぎるため森の中はうす暗く、足元にはコケなどが一面に生えています。この森は北半球の高緯度^{いと}地方を広くおおっている北方針葉樹林が、中緯度に位置する我が国にまで分布を拡げたもので、とても貴重な森です。

森に生育する植物の種類は少なく、やや単調な感じがします。コイチヤクソウ、コバノイチヤクソウ、ヒメミヤマウズラ、コフトバラン、コケモモなどやタチハイゴケ、イワダレゴケなど、北方針葉樹林の代表的な植物が観察できます。



▲針葉樹林の林内



▲亜高山帯針葉樹林の景観

●亜高山帯針葉樹林の樹木

亜高山帯針葉樹林を代表する種類は、裸子植物、マツ科の樹木がおもで、松ぼっくり（球果植物）をつけます。代表種のシラビソ、トウヒ、コメツガ、カラマツなどは、どれもがよく似ていますが、葉や樹皮でその違いを観察してみましょう。

シラビソ（マツ科）

本州福島県から和歌山県の太平洋側に分布します。日本海側の多雪地にはよく似たオオシラビソが分布し、北海道にはトドマツが分布します。

コメツガ（マツ科）

亜高山帯の尾根や岩の多い環境かんきょうに好んで生え、火山の富士山では多く見かけます。小さな葉を米粒つぶにたとえ、この名で呼ばれます。

カラマツ（マツ科）

本州中部地方から東北地方南部に分布します。針葉樹は多くが常緑ですが、カラマツは冬に落葉します。乾燥・寒冷かんそうに適した生活形で、火山の富士山には多く見られます。



▲シラビソ



▲コメツガ



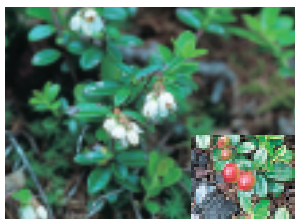
▲カラマツ

あ
● 亜高山帯針葉樹林の植物

亜高山帯針葉樹林に生える背の低い植物を観察してみましょう。

コケモモ (ツツジ科)

高さ約10cmの背の低い樹木。針葉樹林内に生える代表種。北半球高緯度地域に広く分布。鐘状の花をつけ、秋には果実が赤く熟す。富士山では乾燥したカラマツ林などに多い。



▲コケモモ

コバノイチヤクソウ (イチヤクソウ科)

亜高山帯針葉樹林のやや湿った所に生えます。半寄生の常緑の多年草で、白色の花をつけます。仲間のベニバナイチヤクソウは明るいカラマツ林などに生えます。



▲コバノイチヤクソウ

カニコウモリ (キク科)

葉の縁にはふぞろいの切れ込みがあり、カニの甲らに似ています。本州中部地方、四国の針葉樹林に分布する多年草で、やや湿った所に生えます。



▲カニコウモリ

タケシマラン (ユリ科)

葉を左右に規則正しく広げる高さ20cmほどの多年草。ふつう茎は2つに分かれ、花は葉の下側に咲き目立ちませんが、秋には実が赤く熟してよく目立ちます。本州の亜高山帯針葉樹林に分布。



▲タケシマラン

●小富士周辺の荒原に生える植物たち

小富士周辺には火山荒原があり、砂やレキにおおわれて土は少なく、乾燥して栄養分に乏しく、植物の生活にはきびしい環境です。小富士周辺の火山荒原に生える植物を見てみましょう。

オンタデ (タデ科)

荒原でふつうに見られる多年草。砂やレキがたえず崩れ落ちる環境に生えます。雄の株と雌の株は別で、秋には実をつける雌株が目立ちます。火山の木曾御岳で記録され、タデの仲間のため蓼(オンタデ)の名で呼ばれます。

ミヤマオトコヨモギ (キク科)

大きな岩かけ、砂やレキ地の不安定な所に生えます。ヨモギの仲間です。地味な頭花をたくさんつけます。

ムラサキモメンツル (マメ科)

地面に伏せて生え、紫色の花をつけます。ユーラシア大陸から北アメリカ大陸まで広く分布します。富士山ではよく見かけますが、分布の限られた植物です。



▲オンタデ



▲ミヤマオトコヨモギ



▲ムラサキモメンツル

●ダケカンバ林

富士山の中腹には急な傾斜地けいしやが多く、沢状の地形さわが多く見られます。そこでは積雪えいきやうの影響を受けたり、たえず雪崩なだれが起こったりします。このようなところには針葉樹は生育できず、雪崩や積雪に耐えて生きられる落葉広葉低木林がふつうに見られます。雪崩の起こる道すじや沢状地に生える代表的な種はダケカンバ、ミヤマハンノキ、ミヤマヤナギなどで、低木が群落を形成しています。

この急斜面しやめんに生えるダケカンバやミヤマハンノキを観察すると、幹が下曲し、積雪や雪崩の影響を受けているようすを観察することができます。積雪期をのぞけば、林の中には草本類が一面に生え、ヒメノガリヤスなどのイネ科植物を主にクルマユリ、タカネゲンナイフウロ、ヒメシャジン、ヤハズヒゴタイ、イワニンジンなど、多くの花を観察することができます。



▲ダケカンバ林



▲ミヤマハンノキ



▲冬のダケカンバ林



▲ミヤマヤナギ

●ダケカンバ林の植物

ナナカマド (バラ科)

初夏、小さな白い花を多数つけ、秋には赤い果実や紅葉が目立ちます。葉は鳥の羽のように小葉が4~7対規則正しく並びます。和名は材が燃えにくく、7回かまどに入れても燃えないことに由来します。



▲ナナカマド

タカネバラ (バラ科)

ダケカンバ林や登山道沿いの明るい草原などに生える低木で、紅色の花が目立ちます。美しい花で富士山ではよく見かけます。和名は高山に生えるバラを意味しています。



▲タカネバラ

クルマユリ (ユリ科)

草原やダケカンバ林に生える多年草。オレンジ色の花が目立ちます。和名は葉が車状につくことに由来。花は茎の頂きに数個、斜め下向きにつけ、花被片は反り返ります。



▲クルマユリ

ヤハズヒゴタイ (キク科)

ダケカンバ林に生える多年草。キク科の花は小さな花（小花）が集まって頭花になります。下の葉は深く羽状に切れ、矢筈（矢を弓の弦にかけるところ）の形に似て名が付いています。



▲ヤハズヒゴタイ

すばり こんちゆう
●富士山須走口の昆虫

須走口を登っていくと、旧馬返しうまがえという場所があります。そこから水のない沢さわに沿って小富士こふじまで登る登山道があって、昆虫類の観察には適しています。この沢沿いの部分は明るく開けていて、チョウなどの活動場所になっています。

コエゾゼミ

木々の高いところから「ギーギー」という鳴き声が聞こえてきます。コエゾゼミの鳴き声です。高いところで鳴いていることと、森の中では音が反響はんきやうするため、その姿を見ることはなかなかできませんが、ヌケガラを見つけることができます。平地のアブラゼミと同じくらいの大きさで、濃いこげ茶色のヌケガラです。



▲コエゾゼミ

ホシミスジ

黒い地に3本の白いすじ模様の羽をもつチョウです。うしろ羽の付け根にある黒い点とくちゆうが特徴です。ピンクの花をつけるシモツケの葉を幼虫は食べます。明るい沢すじで「スイースイ」とゆっくり飛んでいる姿を見ることができます。このチョウによく似た白いすじが2本のフタスジチョウは、富士山の静岡県側では、この辺りだけで見ることができます。



▲ホシミスジ

エゾスジグロシロチョウ

キャベツ畑でおなじみのモンシロチョウによく似た白いチョウが目に付きます。すじが目立つこのチョウはエゾスジグロシロチョウで、モンシロチョウより暗いところを好みます。幼虫はフジハタザオを食べて育ちます。このチョウのオスはレモンのようなおいを出します。



▲エゾスジグロシロチョウ

ミドリシジミの仲間

7月頃、沢すじの明るい空間に突き出た枝先でなわばりを作って飛び回っている小型のチョウがいます。太陽の光を反射して青緑色に輝いています。ミドリシジミの仲間のオスで、日本には25種類います。昔はラテン語で「そよ風」を意味する「ゼフィルス」と呼ばれていました。



▲メスアカミドリシジミ

なわばり活動する時間が種類によって違い、朝はアイノミドリシジミ、昼前にはメスアカミドリシジミが活動しています。緑色に光らないウラゴマダラシジミやウラキンシジミなども見られます。樹木の新芽を幼虫が食べるため、1年に1回、夏にだけ見ることができます。



▲ウラゴマダラシジミ

●小富士コースの野鳥

コゲラ (キツツキ科) 留鳥

全長15cm。キツツキの仲間では、いちばん小さく、スズメくらい。明るい林で枝から枝へ渡りながら「ギーギー」と鳴きます。枯れかかった木に直径3cmほどの巣穴を作り、一年じゅう同じ地域で生活します。



▲コゲラ

アカハラ (ツグミ科) 漂鳥

全長24cm。冬は暖かい地方で生活します。体の上面は暗い緑褐色、胸は黄橙色、腹は白です。繁殖期には明るい自然林やカラマツ林で「キョロン、キョロン、ツイー」とさえずります。亜高山では常緑の林に好んで巣を作ります。



▲アカハラ

ウソ (アトリ科) 漂鳥

全長15.5cm。冬は山地の林で生活します。木の実や花芽を好み、繁殖期には亜高山へ移動します。「フィ、フィ」と口笛に似た声でさえずり、常緑の針葉樹に巣を作ります。オス、メス同時に育巣をする仲のよい鳥です。



▲ウソ

オオルリ (ヒタキ科) 夏鳥

声、姿は美しく、山地の沢沿いの林で「ヒーフィーラー、ヒーフィフィフィ」と澄んだ声でさえずります。体の上面は光沢のある青色で腹は白。須走登山道では、木ノ根沢の溪谷で岩のくぼみにコケを使って巣を作ります。



▲オオルリ

キクイタダキ (ウグイス科) 漂鳥

日本の野鳥では最も小さく、冬は暖かい地方で生活します。6月頃には須走五合目付近の針葉樹で「ツリツリツリチリチリリ」と細く小さな声でさえずります。コケやサルオガセを使い、コメツガの枝に巣を作ります。



▲キクイタダキ

ミソサザイ (ミソサザイ科) 漂鳥

冬は低い山地で生活します。全身は黒褐色で、登山道や沢沿いで「ツルルル、ピツイ、ツイツイツイピイツルルル」と、複雑に繰り返しさえずります。繁殖期には岩や土手のくぼみに、コケや小枝を使い、巣を作ります。



▲ミソサザイ

メボソムシクイ (ヒタキ科) 夏鳥

全長13cm。上面はオリーブ色、目の上には眉のような白線が目立ち「ジュリジュリジュリジュリ」と四拍子でさえずり「銭取り、銭取り」と聞こえます。標高1300mから2400mくらいの林で見られます。



▲メボソムシクイ

アオゲラ (キツツキ科) 留鳥

全長29cm。上面が黄緑色の美しいキツツキで、「キョツ、キョツ」と鋭く鳴き、繁殖期には「ピョー、ピョー」と太い口笛のような声も発します。低山の林に生息していますが、小富士付近でも見られます。日本だけに生息。



▲アオゲラ

ホシガラス (カラス科) 留鳥

全長34.5cm。全身黒褐色で星のような白い斑点が散りばめられていることから、この名前があります。富士山では山梨県側の亜高山帯に多く、カラマツなどの針葉樹の実が好物です。「ガー、ガー」と、声を伸ばして鳴きます。



▲ホシガラス

ヒガラ (シジュウカラ科) 留鳥

全長11cm。頭は黒く短い冠があり、背が灰青色の小さな鳥で、針葉樹の高い枝先を飛び回り、「チーチーピー」、「ツッピン、ツッピン」と高い声で鳴いています。繁殖期以外は他の種類の鳥と群れを作っていることが多いです。



▲ヒガラ

イカル (アトリ科) 留鳥

全長23cm。ずんぐりとした体型に、黄色い大きなくちばしと黒い頭が目立ち、「キーコーキー」とよく通る声で鳴きます。麓の雑木林から標高1700m付近にかけて住み、秋から春にかけて群れで飛んでいるのが見られます。



▲イカル

ルリビタキ (ヒタキ科) 漂鳥

全長14cm。オスは名前の通り背中が青色（メスは地味なオリーブ色）で、わき腹がオレンジ色の美しい鳥。「ピョロロロ」と弾むようにさえずります。6月から8月に亜高山帯の薄暗い針葉樹林にある土手のくぼみに巣を作ります。



▲ルリビタキ



富士山憲章 (平成10年11月18日制定)

(行動規範)

富士山の自然を学び、親しみ、豊かな恵みに感謝しよう。

富士山の美しい自然を大切に守り、豊かな文化を育もう。

富士山の自然環境への負荷を減らし、人との共生を図ろう。

富士山の環境保全のために、一人ひとりが積極的に行動しよう。

富士山の自然、景観、歴史・文化を後世に末長く継承しよう。

静岡県・山梨県

◇著者 (この本をつくったみなさん)

富士山自然誌研究会 ほか

今泉 忠明 (東京都)

滝 道雄 (裾野市)

岩田 幸久 (小山町)

谷川 久男 (三島市)

大嶋よし子 (長泉町)

出川 洋介 (小田原市)

長田 昭典 (御殿場市)

二階堂 賢 (平塚市)

菅原 久夫 (長泉町)

細倉 哲穂 (沼津市)

菅 常雄 (小山町)

山本 玄珠 (富士市)

高橋 英朋 (御殿場市)

高橋 豊 (長岡町)

◇写真協力

大嶋 章

山本 孝治

※この本は古紙100%配合の
再生紙を使用しています。

「静岡県自然観察ガイドブック」シリーズ

既刊好評発売中！

- | | | |
|------------|-------------|---------|
| ① 引佐渋川 | ⑪ 伊豆須崎 | ⑳ 函南原生林 |
| ② 浜北森林公園 | ⑫ 御前崎海岸 | ㉑ 浜名湖 |
| ③ 天城峠とその周辺 | ⑬ 安倍峠 | ㉒ 朝霧高原 |
| ④ 大井川河口 | ⑭ 寸又峡 | ㉓ 谷津山 |
| ⑤ 佐鳴湖 | ⑮ 水窪自然林 | ㉔ 富士山東麓 |
| ⑥ 城ヶ崎海岸 | ⑯ 愛鷹山麓とその周辺 | ㉕ つたの細道 |
| ⑦ 丸火自然公園 | ⑰ 西伊豆の自然 | ㉖ 中田島砂丘 |
| ⑧ 県民の森 | ⑱ 桶ヶ谷沼 | 青字は新刊 |
| ⑨ 岩岳山 | ㉑ 小笠山 | |
| ⑩ 日本平 | ㉒ 三保と久能山 | |

表紙写真：赤塚より富士山をのぞむ

自然観察ガイドブック㉕

富士山東麓

定価300円

(本体286円+税)

■企画編集■

静岡県 環境森林部自然ふれあい室

TEL. 054-221-2849 (自然ふれあい係)

(社)静岡県出版文化会

〒420-0856 静岡市駿府町1-12 県教育会館2F

TEL. 054-255-4451(代) FAX. 054-254-5779

■著 作■

富士山自然誌研究会 ほか

代表 菅原久夫

■制作発行■

(株)静岡教育出版社

〒422-8006 静岡市曲金5-5-38

TEL. 054-281-8870(代) FAX. 054-286-6590

© 2003.3

ISBN4-901348-10-8 C0145 ¥286E

0303